

東日本大震災と大学

この度の東日本大震災により、犠牲となられた皆様に、深く哀悼の意を表すると共に、被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

かつて関東大震災の時に寺田虎彦は「天災は忘れたころにやってくる」という名言を残しました。以後、この言葉は、災害を人間の備えの怠りに対する罰、あるいは健忘への懲らしめとしてとらえる、なじみの諺となってきました。しかし、この寺田は10年後の昭和三陸大津波の際に「津波と人間」の一文を草し、「地震や津波は新思想の流行などには委細構わず、頑固に、保守的に執念深くやってくる。……だから、人間はもう少し過去の記録を忘れないように努力する外はない。……併し、少数の学者や自分のような苦労性の人間がいくら骨を折って警告を与えてみたところで、国民一般も政府も当局者も決して問題にはしない。これが一つの事実であり、人間界の自然法則であるように見える」と嘆息せざるをえなかったのです。

今回の災害がもたらす犠牲、被害、その社会的・経済的影響の、未だはかり知れない甚大さや深刻さから、われわれはどのような教訓を引き出すべきでしょうか。恐らく、今回の地震、津波と原発事故、つまり、自然過程のもたらす災禍と人間が造り出す大惨事の複合は、寺田の場合以上に、より根元的な省察をわれわれに求めているように思われます。「予知」や「防災」が声高に叫ばれるなかでの惨状は、「自然の終焉」ではなく、「自然の存在」を現出し、また「安全神話」が時々刻々崩れゆく様は、人間による管理の限界を露呈し、われわれ人間のあり方を照らし出しています。加えて、災害の発生に際してとらえる対応の仕方によって倍加される不条理が、われわれの社会のあり方を曝け出しているからです。

今回の災害に際して、「未曾有」や「想定外」の語が頻繁に使われましたが、それらを専門家の責任の解除としてではなく、われわれの思考前提の再考を促している証左として受けとらねばなりません。今回の災害がもたらした犠牲や被害を贖うことはとてもかなわぬことであるが故に、大学に課せられた責務は、この不条理を克服するための、新たな知的・実践的挑戦に赴くことにあるのではないかと思います。今回の災害が、人間の実存的状況を現出させたが故に、本大学の掲げる「福祉」の理念を、人間が生きるとはどういうことかの原初の問いに、今一度立ち戻さねばなりません。しかし、同時に災害による被害には、その時代時代の文明の到達とその脆さが映し出されることから、復旧や復興は、それ自体が目的ではなく、付可逆的に、新たな文明の構築を目指さねばなりません。

本学は、今回の災害がわれわれに課した厳しい試練に忍耐強く立ち向かい、本学の総力をあげて東北の復興に些かでも尽力したいと考えます。

平成23年3月28日 社会貢献センター

